

は じ め に

文学部長の小野信爾です。

これから 90 分間、本学が教学の柱の一つにすえております人権問題についての講演会を開催いたします。

昨年はフランス革命 200 周年でしたが、フランス革命で人権宣言が「人は生まれながらにして平等である」と高らかにうたいあげたことは諸君もご存知のとおりです。「人は生まれながらにして平等である」という考えは同時に、仏教精神にも通底する、共通するものだと思います。しかしそのフランスでも、たとえば、女性に対する差別は人権宣言で一挙に吹っ飛んだわけではありません。フランスで、女性に選挙権が認められたのは、フランス革命から百数十年経って、やっと 20 世紀に入ってからのことでした。諸君らは女性が選挙権を持つということは、ごく普通のことだと思っているでしょうが、そういう人権意識がごく普通のことになるためには、これまで多くの女権運動家、日本でも大正時代からございましたが、そういう女権運動家た

ちの運動の積み重ね、努力のうえで、それが常識化していく。つまり人権意識というものは、有名無名の人びとの努力を通じて社会とともに発展するものだということを、一つおさえておきたいと思います。

差別といいますと、本人の責任でないことで、身分的、あるいは社会心理的、あるいは経済的な差別、迫害を受けるということだといいますが、日本では300万人、6,000部落といわれる部落問題があることは諸君もご存知のとおりです。ことに関西では、この問題は大きな社会問題であります。1956年、今から25年前に政府が同和対策審議会の答申といたしまして、部落差別問題の解決は国民的課題であるとうたいあげて以来、多くの改善事業がおこなわれました。物質的、経済的な側面は相当に改善されたように思いますが、しかし社会心理的な面、および就職差別にみられるような経済的な面での差別は依然として根強いものがあります。

その差別の痛み、苦しみというのは、受ける当人でないとなかなかわからないということがございます。私どもは教学の柱として人権教育をすえて以来、そういう差別される側の痛みをわが痛みとする共感、感覚を同じくする、と

もにする努力をしまいにしました。われわれはその他にも差別の渦まく社会の中にあります。いわゆる学歴差別、思想差別、さらに男女の性差別、もろもろの差別の渦まく中におりますが、その中でもいちばん単純明快で不当、不合理きわまりない性格のものとして、部落差別問題があるのです。これすら解決できずに、他の差別が解決できるはずがないというのが私どもの立場であります。

もう一つ関西ではとくにウエイトが高いわけがありますが、在日韓国朝鮮人の問題がございます。戦争中、労働力として強制的に連行された人びと、つまり日本の戦争責任の中で、在日韓国朝鮮人問題というのはおこっているわけです。諸君は新聞、その他でご存知のように、外国人登録証問題、指紋押捺問題ということで、彼らの人権に対する人権擁護の運動がおこっている。

ところで、本学の人権教育に対して、昨年、大変顕著な攻撃が加えられました。それは7月から9月にかけて、解放教育に取り組んでいる機関、個人、および学内のサークルに対して、数通の脅迫状が相次いで舞い込んだことあります。姿は現しません、その団体は関西派民族学生協議会花園大学支部と称しまして、天皇中心主義を掲げ、そ

の立場から花園大学内での解放運動に非難、中傷を浴せました。部落差別と在日外国人、とくに韓国朝鮮人に対する排斥とを一つに出しました。夜道の一人歩きには気をつけろといった類の匿名の脅迫状を送りつけてきたわけです。

その後、ご存知のように、長崎では本島市長が右翼に銃撃されるという事件が起こりました。これはいわば露頭といえますか、表面に出た事件であります。その裾野は実はわれわれの周辺にも広がっている。ドイツなんかでも復活が懸念されておりますファシズムの脅威は、われわれの身近なところにもあるということの一つ認識していただきたいと思います。

それでは、司会が長々と話をしている時間的な余裕もございませんので、本日の講師であります平野宗浄老師をご紹介申しあげます。

平野先生は、実は一昨年、88年の3月まで、本学の仏教学科で教鞭をとっておられた方です。一昨年、懇望されて、有名な仙台の松島の瑞巖寺へ移られました。現在、僧堂の雲水を指導する師家をなさっております。京都にいらっしゃる頃から「部落差別と宗教研究会」に所属されまして、熱心な研究活動をなさり、その足跡はインドに

まで及んでおりますが、今日は先生のご講演を諸君に拝聴
していただきたいと思います。

それでは平野先生、どうぞよろしく願いいたします。

1990年度

花園大学解放教育研究委員会委員長

小 野 信 爾

「人間の差別と宗教」

講師 松島瑞巖寺僧堂師家

平野宗浄 老師

ただいまご紹介にあずかりました平野でございます。私はこの大学の前身である臨済学院専門学校で学び、それから花園大学第三回卒業生でありまして、諸君の先輩ということになるわけでございます。

本日は、新入生諸君ご入学まことにおめでとうございます。しかしながら、まず初っ端に、ぜひ諸君らに心にとめておいていただきたいことは、どなたかすでにおっしゃったかしらないが、この過激な受験戦争に花園大学に入学できなかった諸君、わずかな差でも入学できなかった諸君、この人たちのことをちょっとでもいいから考えてほしい。入学したといった喜びばかりでなくて、残念にも入学できなかった諸君、その人たちのことをまず考えてほしい。そういうことは、人権ということのもっとも基本的なものです。競争のはげしい世の中で、落ちこぼれていこうとする第一歩、つまづき、それは花園大学を落ちてでもそれ

にめげずに一生懸命に、諸君らに負けずに社会に立ち向かっていく人たちは沢山おられると思いますが、まず人生のスタートでつまづいた人たちのことを考えるということ、常に弱いものの立場に立ってものを考えるということが、人権ということを考えるうえでの第一条件です。第一声に私はそれを申しあげておきたい。

私は話が下手で、まとまったような話ができない。あちこちポンポンと飛びますが、あまり私がまとめてしまうと聞き流してしまう恐れがあるので、私のように支離滅裂であっち行ったり、こっち行ったりすると、諸君のほうでどうなったのかなと気をつけなければならないと思うので、そういうメリットも少しはあるのではないかと思います。

「人間の差別と宗教」という題にしましたが、宗教の話は当然沢山出てきますし、それ以外にいろんな話が出てまいります。ところが、私は宗教者ですから、こうして衣を着てまいりました。だから私の発言はほとんどすべて根源には宗教者としての発言があるわけですから、宗教以外のことを申しあげても、それはどこかで宗教とつながっている。

諸君らは花園大学に入学された。入る前から花園大学と

いうのはどういう大学かということをあらかじめご存知で入られたと思います。だから何らかの意味で、宗教にかかわらなければいけない。そのためには宗教というものをある程度知っていただかなければならない。そして宗教の悪いところと良いところを識別する能力を四年間で養っていただきたいという気持ちが私にあります。私は諸君らの先輩として、宗教が差別にいかにか手を貸してきたかという、宗教の悪い面を相当おしゃべりしたいと思います。

良い面は嫌でも諸君らは四年間のあいだに、いくらでも先生方から聞かされるに違いない。ところが悪い面はあまり語りたがらない。ところがこの宗教の悪い面こそ大事なのです。とくに人権問題にとって大事なことであります。

先般、ここの大学の創立者であります妙心寺派の本山から差別について何か書けということで、機関誌に少し書いたのです。そのことも途中でちょっとご紹介します。

私は花園大学にいるあいだ、今、小野先生がおっしゃったように、まず最初は私が文学部長になったときに、近畿の学長会議というのがありまして、大阪の被差別部落を見学にまいりました。実際に被差別部落の中に入っていったということをはじめで、部落差別問題に目を開かされた。

皮肉にも、その明るる年の暮に、教室での授業中に部落差別事件がおこりまして、解放同盟の京都府連、大阪府連、矢田支部の三者による糾弾会を、私が受けましようと思いましたが、最初は「大変なことが起こった、どうしましよう」ということでした。しかし、私はもうすでに大阪の被差別部落に行って目を開かされておりましたので、本当に自分自らが部落問題に取り組もうと、私の中における差別心を自ら取り除いていきたいというところから、自らすすんで糾弾会を受けることになり、全部で五回の糾弾会を受けました。

後で感じたのですが、そのときに解放同盟から「学長さん（当時は大森曹玄老師）はどうしましたか。あなたは文学部長でしょう。その上のトップで花園大学の最高責任者である学長さんはなぜ出て来ないのですか」と聞かれました。そのときにあらかじめ、私は自己批判するのですが、皆さんと相諮って「学長さんを傷つけることは、お年寄りであるし気の毒だから、また、とくに東京におられますから気の毒だから、また、学長さんを表に出さないで、文学部長である私が全責任を負って正面に立って糾弾を受けましよう」といったのです。その姿勢がいかんですね。仏教

者の体質と申しますか、こういう学校の体質と申しますか、一番トップの人を正面に出さずに、お年寄りだからとかいって隠すのは、本当に学長さんのことを思ったのではないのですね。学長さんこそ本当に部落差別の問題に関して真先に勉強してもらって、自分自ら糾弾を受けて、自己改革していただきたいというのが本当じゃないですかね。

だから今回といいますか、最近、花園大学でやはり差別事件があったようです。私が退職してからですから詳しくは存じませんが、聞くところによりますと、確認会、あるいは糾弾会がおこなわれたそうです。この場合も、学長さんは奉っておいて、宗門を代表する教学の責任者は傷つけないようにという配慮かどうかはわかりませんが、私の推理ではそういうところがあったのではないかと思います。それで文学部長である小野先生とか、あるいは副学長さんとかが正面に立って糾弾を受けて、自己改革に努力されるという体質ですね。花園大学のそういう体質は、私が糾弾会を受けた七、八年前と思いますが、その頃からちっとも変わっていないじゃないか。つまりあのときに五回糾弾会を受けて、教授会員が出席をして、差別に対する心の改革というものができていたはずであるにもかかわらず、また

もやそういう糾弾会を受けるようなことを起こしたということは、花園大学の教職員の差別に対する意識がもっとも進歩していないじゃないかという印象を受けました。

解放同盟の糾弾会の、何回目かの時、ついに私は学長さんに糾弾会に出席してもらいました。その頃私は反省を少ししておりまして、「学長さんに糾弾会に出てもらいましょう。その場で学長さんがまた差別発言をしようが、これはやはり学長さんの勉強になるのだ。学長さんの人間的な改革に必要なことなのだ」ということを私は心に決めたのでした。安の定、学長さんは微妙な差別発言をなさったのですが、その時は皆さんはあまり気がつかず、直後私達の内部の反省会で、私は学長さんの微妙な差別発言を問題にし、次の糾弾会でこちらから問題提起して謝罪しました。その直後学長さんが「私はずっと東京にいて、部落差別の悲惨さやいろんなことを知らなかった。何か目を覚まされたような感じです」といわれまして、本当によかったと思いました。

やはり花園大学の最高責任者は自ら差別問題に取り組んでいただきたい、差別問題ということと禅ということは切り離して考えられないというのが私の持論です。

先般といっても、1987年でございましたが、東本願寺の以前の宗務総長であった訓覇さんが大変な差別発言をして、私が属しておりました部落差別と宗教研究会が真先に取り上げました。どういうことかと申しますと、詳しいことは時間がありましたらまたお話しますが、今申しあげたい簡単なことは、「私は自己とはなんぞやということに、これで一生懸命で、やれ同和とか、やれ靖国とか、そういうことを考えている暇はないんだ」というようなことをいったのです。大変な差別発言です。これが差別発言であるということがわかりますか。何が差別かということを見抜く力というのが大事なのです。単なる東本願寺だけの問題ではないのです。訓覇さんという人は有名な清沢満之という人の精神主義なのですが、これは大正から昭和にかけて本願寺教団の教学面で革命的な教学者であるといわれていますが、この人自体が相当な差別心を不思議にも持っているのです。だんだんそういうことがわかってきたのです。肝心なのは自己とはなんぞやということで、これがいちばん大事で、社会問題とは別だという考えです。これはわれわれ禅宗教団にとって、自分の教団の反省のいちばんの材料になるのではないかと思います。

われわれ臨濟宗には、曹洞宗でもそのようですが、己事究明、自己とはなんぞやということをきわめるのがいちばん大事なのだ、ごちゃごちゃ何か運動したり、他を批判するのは本来の道からそれることだ、というのが通念とあります。しかし、そういう精神、つまり社会問題、とくに人権問題と自己とはなんぞやということを切り離すということは、人間として生きるいちばん根源的なところでずれているのではないか。

花園大学にはいろんな学科がありますね、諸君は仏教、社会福祉、史学、国文、それぞれの学問を専門的にこの4年間できわめられると思います。しかしそのそれぞれの分かれたいろんな専門的な学問と人権問題ということとは別ではない。それぞれの学問をきわめることイコール人権問題をきわめること、人権問題をきわめること自体がそれぞれの学問に必ず関係が深いということの自覚が今までほとんどなかったのではないか。

とくに禅宗は坐禅をして、己事究明といいまして、自己とはなんぞやということを一所懸命きわめます。そのとおりなのです。一所懸命やるのです。僧堂でもほとんど万事を放擲ほうてきしてやっております。しかし、私は常に修行者であ

る雲水諸君に提唱のとき、あるいは日常接していろんな茶飲み話のときにも、この差別問題の話を常に問いかけて、そして私自身も勉強していくことをやっております。そして雲水諸君らが一人前になって、各地方の住職になっていかれたときには、この人権問題というものが根本にあって、そして檀家の人びとに対して、あるいは仏教信者の人に対して、ともに語って、ともに人権問題を勉強していただきたいというのが私の念願であるわけです。

私は一昨年、関西から東北へまいりまして、私は事あるごとにいろんな和尚さん方に会いますと差別問題の話を切り出すのです。そして常に返ってくるのは、「東北には被差別部落はありません」と口をそろえていいます。その言い方がいかにも「だから私らは部落差別問題にかかわらなくてもいいんだ」という下心がありありと私の目に映るのです。これも一般の普通の人の目から見たら何ともないように思います。「被差別部落がなかったら、部落差別の問題はよそ事だ。私らは何も関係ないから関知しなくてもいい」ということを平気でいう。「それはあたりまえじゃないですか」と居直られる。これが大きな問題だというのです。そのことをこのあいだ、妙心寺の機関誌に書かせても

らいました。つまり自分は差別心がないんだという意識のある人間がいちばん大きな差別者であるということです。偉そうに差別問題で話をしている私自身が私の心を深く反省してみますと、まだまだ差別心があるという、常にそれへの反省ということがいちばん大事なことであり、私は思います。そこから差別を見抜くという力が出てくると思います。

以前に糾弾会を受けたときに、矢田の被差別部落へまいりました。そのときに、戸田支部長さんが、「差別されている私ですら、差別心があるのです。若い時は、在日韓国朝鮮人に対して、『チョンコ、チョンコ』というような差別語を平気で使っていた。われわれ部落民の下にまだ差別されている在日韓国朝鮮人がいるということで、自分らは少しでも安心感を得るというようなことをやってきた。」と話されましたが、それは本当に悲痛なお話でした。われわれ糾弾される側にそういうお話をなさって、本当に感激したのです。

続いて女性差別の問題も取り上げられました。自分の奥さんに対しても、「私はまだ女性に対する差別意識を持っています。これではいかんと思うのですが、なかなかそれ

がとれません」というふうに。それを聞きまして、私はこういう人たちから喜んで糾弾を受けようという気持ちを新たにしました。本当にそうです。

よく最近は糾弾というのは、「糾弾を受ける側の人権問題はどうしたんだ」と居直る人が増えているようですが、糾弾会というのは差別する側、差別される側が本当に真剣にお互いに切磋琢磨して差別をなくしていこうという場であり、あれほど真剣な場というものは他にないと私は思いました。そういう意味で、今後、糾弾ということは大へん意味のあることだと、私は経験上、確信しています。

そういう立場からいろいろ反省しますと、いわゆる仏教、仏教者には根深い差別があるのです。妙心寺派は「うちには差別はないんだ」と思っているふしがあります。曹洞宗は、諸君には知っている人もあると思いますが、有名な町田師差別発言事件というのがありまして、駒沢大学の私の友人などは真剣になって取り組みました。そして本山に対していろいろ助言をしたり、あるいは苦言を呈したりやっておりますが、曹洞宗の本山も宗務本庁と申しますか、相変わらずその体質は変わりません。宗教家のなにかどろどろしたものが、一回や二回ではなおらないように思います。

妙心寺の本山には果たして差別事象が全くないといえるでしょうか。しっかりと反差別への努力をしているのでしょうか。それで同和推進会をつくって、一応は努力しているようにみえますが、私にはまだまだのように思えます。

いろんなことを申し上げたいのですが、あまりむずかしいことは申しあげません。いちばん身近なところから申しあげますと、まずいちばん大きな、全国どこでも、東北でも「部落差別はありません」とあっけらかんという人に対して、「それじゃ君たちは在日韓国朝鮮人に対する差別心はどうか。東北に在日韓国朝鮮人はいないのか」、あるいは「身体障害者はおらんのか。そういう人びとに対する差別問題を考えたことがあるのか」というのです。そしてもうひとつ大きなのは、「女性差別に対して君らはどう考えているのか」。

なかんずく宗教と女性差別の問題というのは根深いものがあるのです。私はあまりむずかしいことはいいませんが、具体的なことばかり申しあげると思います。

いちばん最近に、諸君らも知っていると思いますが、今年の大相撲の初場所で、表彰式の土俵で森山前官房長官が表彰状を渡したいとあって、それが拒否されたのです。そ

のときの相撲協会の言い分は「これは不文律である。今まで女性が土俵に上がったことはないので、この伝統を破るわけにはまいりません」ということで断られました。そして森山前長官はぶすぶすいいながら引っ込んだのですが、なぜこのときにもっと突っ込まなかったのかと、私は非常に残念なのです。それは何かとといいますと、この大相撲のときの女性を土俵に上らせなかったいちばんの根源は、女性に対する不浄観です。女性差別の根源は女性は不浄である、これは神道からきております。もちろん仏教にもあるのです。これは問題です。これもあと時間があれば、ヒンズー教の女性差別、あるいはそれを自ら革命していこうと奮闘されたアンベドカル博士のことを、申し上げたいと思います。

とにかく日本の神道の女性に対する不浄観にはすさまじいものがあります。女性は月に一度のメンスがある。このメンスを不浄だというのです。あるいはお産をするのも不浄だと。そういう女性に対する、とにかく相撲は国技でしょう、あの相撲は神道と密接な関係があります。だから神道の不浄観そのものが相撲の中に入りまして、それが伝統となっている。女性に対する不浄意識、差別意識もどこかへ

やっちゃって、「伝統でございます。伝統でございます」とごまかしていた。この女性差別というものに、なぜもっと森山前長官は突っ込んでいかなかったのか。この人は自分自身が何か偉くなってしまって、世の中の女性差別に対する問題を取り上げることを忘れてしまったのではないかと、私はかんぐりたくなるのです。

それに女性差別のもっと根源に大きなところを諸君に紹介したい。それはつまり天皇の住んでいる宮中です。

天皇の先祖が天照大神であるという伝説があって、それを祀ってある所を伊勢神宮といいますが、その伊勢神宮の別社と申しますか、天皇はいちいち伊勢神宮へお参りに行けないから、天照大神の御霊が宮中の賢所というお宮さんみたいなところにお祀りしてありまして、月に何回か天皇はお参りするそうです。

その賢所に仕えている人、いろんな世話をする人は全部女性だそうです。四、五人いるそうですが、いちばん指導者のポストである女性がいて、全部処女です。それもたんねんに家柄とか調べるのです。これがもうすでに差別です。家柄と処女か非処女か、人権を無視してひそかにそれをおこなう。そして赤い袴と白い着物をたぶん着せられて、お

水を換えたり、お神酒を換えたり、柵を換えたり、お掃除をしたり、毎日、賢所でお仕えするのです。そこでその女性たちがまずメンスになりはじめたときに、たちまちその人は休暇を強制的にさせられる。強制的にですよ。それを報告しなくてはなりません。これまたひどいでしょう。「私はメンスになりました」と報告すると、ただちに休暇がでて、宮中から外へ行かされず。メンスが終わったら、帰ってきてよろしいということで、帰ってくるのです。ところが帰ってきてすぐに元の職場に戻れるかということ、そうではないのです。ちゃんと清めの御祓というのをします。これは神道独特のもので、これもいいかげんなものです。なんか祝詞のようなものを唱え、棒の先に御幣のようなものがついたのでジャジャと頭の上をなでたら、これで汚れがはらえましたというような簡単な儀式ですが、それでもその根本は大変な女性差別を含んでいます。ひどいものです。それを何十年、何百年来か知りませんが続けているということは天皇家というもの、あるいは宮内庁というものが女性差別の総本山というふうに思われても、私はいたしかたがないと思います。そういうことで、神道では、今私が申しあげたものが一つの象徴です。いく

らでも出てまいります。

神道はそのへんで一応おいておいて、次は仏教です。仏教で、まず戒律というのがございますね。今残っている仏教の戒律というのは、まずお釈迦さんが亡くなってから作られたというのが学問の世界では定説であって、お釈迦さんはそういうことはいわなかったのだという説もかなりありますが、しかしヒンズー教から受けた女性差別というのは根強く仏教にも影響されている。そして女性に近寄ってはならない。近寄ることはもちろん、性交したら完全に追放ですね。女犯を犯したというのですね。こういう戒律はすべてほとんど男性側からつくったものです。女性側からみたものではないのですね。宗教界というのはほとんどそうですよ。全部男性側からでっちあげられたものです。キリスト教しかり、仏教はもちろんしかり……。

いろんなことを具体的に申しあげたらきりがありませんが、身近なことを申しあげますと、まずわれわれの臨濟宗では、今女性の出家、早くいえば尼さんがどんどん減っています。ということは、われわれの臨濟宗は女性のために何も考えていないからです。まず僧堂がない。男性のための専門道場ばかりで、女性のための専門道場はありません。それか

ら女性が住職する尼寺はみんな貧乏寺です。いわゆる八等地の三級とか二級とか一級とか、私の今住職をしているのは、八等地の三級という妙心寺派の寺で最低の寺の住職ですが、庵主さんといわれる人たちはそういうところに甘んじておられるのです。

臨濟宗だけではないのですが、仏教教団全体の女性に対する差別というのは大きいものです。そして女性は偉くないのです。ある程度の低い階級にしか女性はいけないという仕組みになっているのです。明文化はされてはいませんよ。これも差別につながりますが、法階といって僧侶に階級がある、あるいはお寺にも階級があるのです。特別地とか、別格地、一等地、二等地、三等地とかありますが、こんなものは昔なかったのですが、明治の頃からこういうものができたそうです。これ自体がすでに大きな差別をはらんでおります。女性が最高位にはなれないとか明文化はしておりませんが、仕組みは絶対に女性が上に上がれないようになっています。男性と同じような高位についている尼さんはおりません。厳然たる事実です。

それからもう一ついいたいのは、お寺の奥さんです。諸君の中にもお寺出身の方がおられる。そしてお寺で生ま

れた方もずいぶんおられると思います。浄土真宗以外でお寺の奥さんが公に認められたのはだいたい明治以降です。「肉食妻帯かってるべし」という法例がでてから仏教教団はほとんど妻帯を次つぎしましたが、いちばん遅くなったのが禅宗です。その中でも臨済宗です。お寺の奥さんが公に認められるようになったのもつい最近のことですね。各宗派によって違いますが、お寺の奥さんというのは陰の存在といわれまして、はじめは隠しておいたのです。お寺の外に奥さんを住まわせて、和尚さんはそういうところに通っていたというのはそんなに昔ではありません。

そして私の経験からいきますと、私は妙心寺派に移る前は大徳寺派という宗派でしたが、私は戦争中に小僧になったのです。戦争中は小僧さんはみんな戦争にかりだされた。それまでは奥さんの多くは外にいたのです。小僧さんが徴兵でいなくなって、それを機会に奥さんがみなお寺に入ったのです。それを私は目の当たりにしてきました。それによってはじめて奥さんは和尚さんと一緒に住むことができたのです。結局、敗戦からこちらに、だんだん女性の権利回復ということで、現在、妙心寺派では寺庭婦人ですが、それまでは梵妻（だいこく）といわれたのです。諸君らは

知っている人は少ないと思いますが、これは差別用語です。女性差別の梵妻（だいこく）というのは陰湿な意味を含んでいます。妙心寺派では寺庭婦人という名前になりましたが、つまり言葉さえ変えればいいというものではないのですよ。けっして言葉だけ変えればいいのではない。言葉だけ変えて安心しているのはもっと悪質です。

そういう面で、少しずつは女性の権利は回復しつつあります。徐々に今後もっともっと女性に対する人権というものを教団は積極的にすすめるべきであるというふうに私は思っております。

仏教そのものが女性差別というものをきわめて深く含んでいるという問題を、最近やっと女性たちが目覚めてきて、一所懸命に取り組んでいます。最近、『性差別をする仏教』という本が、花園大学の講師をしておられました大越愛子さんと源淳子さんと山下明子さんの三人で出されていますので、お気持ちがあればぜひ読んでいただきたいと思います。

それから続いて強調したいのは、在日韓国朝鮮人差別です。かつては朝鮮半島を全部植民地として支配し、朝鮮民族に対して、「朝鮮語を使うな、日本語をしゃべらないや

つは罰する」というひどい民族差別をやってきました。その頃は北と南は分かれています。朝鮮に対する全体のひどい差別をおこない。そしてきたない、あるいはつらい仕事をさせるために朝鮮半島から朝鮮人を引っ張ってきて、そういう重労働をさせてきたのです。それだけでもひどいのに、敗戦後、つまりかつて日本人として朝鮮半島から日本へ来た人たち、そう簡単には朝鮮半島に帰れない人たち、もう二世、三世、四世までできている今日、この人たちの朝鮮民族としての人権をまったく考えない今日の日本政府というのは、ひどいものです。あるいは指紋押捺を強制し、あるいは外国人登録証の常時携帯を強制するという在日韓国朝鮮人に対する差別は、いちばん身近な、外国人差別では最もたちの悪い差別である。

私が申しあげたいのは、幸いにも本学は中国の方、韓国の方、朝鮮の方で留学されている方がかなりのパーセンテージあると思いますが、それでもまだ私は少ないと思います。そういう方がたがおられますから、そういう方がたと積極的に親しくなってほしい。

私は在日韓国朝鮮人問題に深く首を突っ込むようになりましたのは、私の親友がやはり在日朝鮮人であるからです。

大阪に、金時鐘さんといわれる詩人がいます。この方は尼崎の夜間高校の先生をしていました。朝鮮あるいは韓国の方は、先生にもなかなかたれないのです。これは被差別部落出身の方も同じです。先生になかなかしてくれない。私はこれは文部省の方針ではないかと思います。金時鐘さんは最近、学校を辞められましたが、北朝鮮の出身であります。もう一人の鄭仁さんとも大の仲良しです。そのお陰で、私はそういう差別される朝鮮人側に立って、ある程度ものを考えるようになったというふうに思います。

そういうチャンスは幸いにも花園大学の諸君は多いのです。新入生の留学生の諸君も十数名おられるようですし、諸君らの先輩にもおられるはずです。ですから積極的にそういう方たちと親しくしていただきたい。日本政府は日本の国際化とかいいますが、ヨーロッパとかアメリカとかそういう方面とばかり、やれ国際化、国際化といって、肝心の真隣の国の韓国、朝鮮の人たちのことを考えていません。我々は、もっと身近な在日韓国朝鮮人の方たちと親しくして、その人たちの人権を守るようにわれわれが努力するというのが、日本の国際化の第一歩、もっとも根源的なものだと思います。

この間近にある国の朝鮮語をほとんどの大学は教えませんね。花園大学だって、つい最近までそうだったのです。かつて私は朝鮮語の講座を開いてほしいということをやかましくいっておりました。教授会でも時々発言しました。幸い小野先生が、姜在彦さんという韓国籍のえらい学者の方を教授としてお招きし、そのルートで朝鮮語講座が開かれるようになったのです。これは本当に私はうれしく思います。もっともっと朝鮮語の勉強をしていただきたい。それから中国語もそうです。中国も真隣です。それであるにもかかわらず、中国語の勉強の時間が減ったというのを聞きまして、私は驚きました。つい最近、花園大学での中国語の講座数が今までより減ったということは、何といてもけしからんことではないかと私は思います。あまり内政干渉するとよくありませんが、私自身はそう思います。

なぜ中国、朝鮮、インド、あるいはインドシナ、インドネシアいわゆる東洋のもっと南のほうの方たちをもっと大切にしないか。つまり日本人は外国人というとヨーロッパ人か、アメリカです。あるいは大学生がこの頃卒業旅行というのがやりまして外国へ行きますが、行くところといったらオーストラリアとかニュージーランドとか、あるいはは

アメリカとか、あるいはヨーロッパばかりで、韓国、朝鮮、中国、インドシナ、インドネシア、のほうへ行かれる人は少ない。インドへ行かれる人も少ない。

インドのことができましたので、約束どおり時間が少ないのでちょっとだけやります。インドはお釈迦さんの生まれられたところで、仏教のいちばん根本のところでもあります。それにもかかわらず、仏教はインドではほとんど地をはらい、ヒन्दゥー教の天下であります。ヒन्दゥー教というのは世界でいちばん階級差別、身分差別のきびしいところです。バラモン、クシャトリア、バイシャ、シュウードラと四つありますが、これはヴルナといいまして、いろいろややこしいのです。その四つの中でもいろんな職業の差別があります。その四つの階級に入らない、アウトカーストという人たち、この人たちは不可触民とまでいわれています。たとえばこの人が町を歩いていて、売っている食べ物、リンゴならリンゴをパッと見たら、もうそれは不浄である、不可触民が見たらそれは不浄であるから全部捨ててしまえという、そういうひどい差別です。いちばんひどいときは、日中、曇っているときはいいが、お日さんの照るときはいかん、その人の影が映ったら、その人の影が不浄だという

ひどい差別を何千年と続けられてきました。

アンベドカル博士という方は、その不可触民の出身であります。この人は1956年に亡くなったのですが、この人はインドが独立して、ネルーが独立後はじめて首相になったときに、法務大臣になって、そういう差別を撤廃する仕事をされた偉大な人です。この方は「私はヒンドゥーに生まれようとも、ヒンドゥーで死なない」という宣言をされて、差別をなくするにはヒンドゥー教から離れるしかないということで、亡くなる寸前にインドのど真ん中のナグプールというところで、私は一昨年行ってまいりましたが、改宗式をやったのです。なんとえらいもので、30万人の不可触民の人たちがアンベトカル博士と一緒にパッとヒンドゥー教から仏教に改宗したのです。その仏教は、今日本にあるような仏教と違いますよ。もっともっと原始仏教に近いものです。

私どもはナグプールへ行ってその新仏教徒の人たちと親しくしてまいりましたが、お祀りしてありますのは、お釈迦さんの写真とアンベドカルさんの写真と二つだけです。そこに蝋燭をともして、線香と、輪になったお花を写真のところへかける、これが彼らの最高の儀式です。そしてイ

インドでは、新仏教とっております。

ナグプールにはアンベドカル大学というのがあり、あるいは高等学校もありまして、そこへも訪問しました。彼らがいわくに、「日本の仏教徒と親しくしていきたい。われわれは孤立しているのだ」。インド全体からいえば、インドの新仏教徒の人たちは本当にわずかなものです。味方が少ないのです。相変わらずひどい差別をされています。だから日本の仏教徒が行くと、われわれの味方が来てくれたと大変よろこんでくれます。しかしインドへ行きましても、よくよく考えたら、われわれ日本仏教徒が今日いまだにずっといろんな差別を続けているわけで、反省しますと恥ずかしくてしかたがない。

そうしていまだに飢えて死んでいく人たちがインドには沢山います。インドだけではなく、アフリカにも沢山……。つまり南側の人たちはいかに多く飢えて死んでいくか。一年に何億という子供たちが南側で死んでいく。それに手を貸しているのが日本だということを反省していただきたい、勉強していただきたい。

もっとこの話は大事な話ですから、続けたいのですが……。本当にそうですよ。北の人間は南を犠牲にして繁栄してい

るのです。日本なんか繁栄して、いわゆる消費生活を贅沢のかぎりをつくしていますが、無駄遣いしているということ自体が南に対する差別をしているということになるのです。

最後に一つ象徴的なお話をしたいのです。昨年(1997年)の9月23日でしたが、現在のローマの法王のヨハネ・パウロ二世が、新聞に載っていたので諸君たちも知っておられると思いますが……。1600年代の終わりにガリレオ・ガリレイが従来の天動説に対して地動説を発表しました。今では諸君は天動説なんて信じる人はないと思いますが、その頃では地動説なんていうと、聖書の教えにそむく大変な危険思想だといわれまして、そしてガリレオは異端尋問にかけられました。1633年に自説の放棄を誓わされました。そして彼の死後もローマの法王庁は彼を墓地に埋葬することすら許されなかった。それを現在のローマ法王ヨハネ・パウロはすまなかったと、つまりガリレオ・ガリレイの説は正しかったのだと謝罪を公表したのです。このニュースを聞いたとき、ほとんどの人の反応は、「いまさら何をいっているのか。あたりまえの話を今ごろになって蒸し返して」と、なかば軽蔑的なまなこでそれを聞いて反応していた。私は私

の周囲の人たちの反応をみていたら、みなそうなのです。

ところが私はそうはとらないのです。これは大変な意味深いものを含んでいる発言だと思いました。それはどういうことかという、天動説を捨てて、地動説を認めて謝罪したということは、天下に地球は丸いということのを新たに認識させようとしたのではないかと私は思うのです。地球が丸いということは、資源が限りがあるということです。もし地球が丸くなくてずっと平面であれば、地球の資源も無限です。「石油がなくなった。そしたらむこうへ行こう。やれ石炭がなくなった。そしたらむこうへ行こう」というように、平面であれば、いくらでも無駄遣いしてもどんどん遠くへ行けばいいのです。ところが地球が丸いということは、完全に資源は限りがあるということです。この小さな地球に資源はわずかである。そのわずかな資源を現在の人間さえよければいいと思って、無駄遣いをして、そして何百年後の子孫のために何も考えない。資源が枯渇してくるのは、100年といいません、もっともっと近いでしょう。ローマの法王は地球は小さいのだ、丸いのだということのを再認識しなくてはならないということのを、彼の心の中でそういうふうにいっただけこそあの宣言があったのではない

かと思います。

だから若い諸君は紙の無駄遣いや、何でもいろんなものを平気で捨てるようですが、このことをやはりみんなで考えて実行したいです。たとえば小さなことですが、本屋さんへ行って本を買おうと、本を包みますでしょう、あれを私は「包むな」というのです。「こんなもので包まれても、後でゴミ捨て場に捨てるだけだ。それよりもこの資源を大切にしてください。裸で持って帰ります」というのです。ポチポチそういう小さなことから始めましょう。しかし、けっして小さなことではないのです、資源を無駄遣いをしないということが、南のほうの人たちの生活につながっているということを肝に銘じて、差別問題というのが日本だけではないのだ、全地球の人権問題であるということを中心に銘じて、これからしっかりと花園大学で学んでいただきたい、そして社会に出ていただきたい。これをお願いして、私のお話を終わりにします。どうもご静聴ありがとうございます。

'90年度 新入生オリエンテーション講演より（4月7日）

（文責在編集者）

